

有信館剣道（神道無念流）の歴史と文化

スポーツ人類学研究領域

5016A029-1 内藤 常男

研究指導員： 寒川 恒夫教授

要旨本文

I 研究動機・目的

戦前の民間剣道場、有信館から生まれた剣豪の一人、中倉清範士九段は、戦前から戦後にかけて剣道界では抜群の強さと実績を誇り昭和の武蔵と異名された。筆者は、学生時代から個人的に中倉清に指導を受けてその強さかつ剣の術理におけるあくなき探求心を実感・体感してきた。それは、中倉清が80歳代の高齢になってなお全日本選手権優勝者クラスを圧倒する身心技法を持っていたことであった。しかしながら、中倉清の剣道は、戦後の剣道界では異色といわれ主流になることはなく、今日それを受け継ぐ剣士は見当たらない。そこで、本研究は、中倉清を生んだ有信館剣道の身心技法の特徴と文化性を史資料に基づいて明らかにすることを目的とした。現代の剣道は、力とスピードに傾斜し、画一的になっていると評されている。本研究は、こうした現代の剣道の評価を検討する素材としての意義を持つだろう。

II 有信館剣道（神道無念流）の歴史

江戸中期から勃興してきた竹刀剣道は幕末に興隆を極めてきた。榎本鐘司によれば北辰一刀流、直心影流などの武士階層を中心に隆盛を誇ってきたのとは違い、神道無念流は遅れて登場してきたこともあり、農民層にも普及しかつ実戦的な術理をかかげて広がっていった。

明治以降再度竹刀剣道が興隆していく中で、同派で大きな役割を果たしたのは、剣理に明るく、大日本帝国剣道形制定の主査

を務めた根岸信五郎そして有信館を継承（1909 明治 42 年）発展させたその弟子中山博道（大日本武徳会の剣道、居合道、杖道三道の段位称号選衡委員長）である。二人は、竹刀剣道を、打突部位を決めて行う競技スポーツに近い感覚でとらえていながらも、神道無念流の上述の実戦的術理からくる刀法やそれを支える心法から、合理的な身心技法を抜き出すことによって、竹刀剣道に奥行きを求めたといえる。つまり、幕末に多くあった流派の中で、明治以降主流となってきた竹刀剣道に流派の生き残りをかけた流派の一つである。対照的なのが高野佐三郎の一刀流を基本とした高等師範系の剣道で、学校剣道に馴染ませるよう変化させていった。国家の学校教育制度の実質を担ったことは、その後の剣道界の主流を形成することになる。戦後、剣道が一時禁止された後に、復活に多大な貢献があったのはこの一刀流・高等師範系の剣道であり、それが現在の全日本剣道連盟の指導要領にも反映されている。

一方、神道無念流・有信館道場は民間道場であった。このため戦後、剣道が一時禁止されたときに消滅、指導者は分散され、戦後復活した竹刀剣道の主流にはなり得べくもなかった。そうした中で、戦後の競技スポーツ化した竹刀剣道の試合（国体、全日本東西対抗戦など）で有信館剣道の身心技法をいかに発揮し強さを示したのが中倉清であった。

III 有信館剣道（神道無念流）の文化

(1)有信館剣道の身心技法

その特徴は要約すれば竹刀剣道に実戦的な息吹を吹き込んだ点にある。その実戦性について二つの観点からまとめる。

1)間合いの攻防

間合いの要素である呼吸、構えの方向、虚实、左右への足さばきを駆使し攻めていくのが主たる特徴である。一刀流系で見られるような、一足一刀から剣先に氣勢をこめて相手の手元を崩していくのとは違いがある。更には、呼吸を独特な技法で練り上げ自らの上体を柔らかくしながら、相手の正中線を攻めつつ間合いに入るので、相手は体重があずけられたような圧力を感じる。そしてその間合いの最終攻防の瞬間、自分をさらけ出すような空間（隙）をつくりながら、相手の虚实の変化をうかがう。相手は、攻められる剣先の構えの方向が変わるような感覚となり思わず自分の体勢が崩れたところを打たれる。科学的合理性と精神力の鍛錬が求められる剣道である。

2)足さばき

上述の間合いの攻防における足さばき、腰さばきを支えるのは左右の開き足、歩み足による起こりが見えにくい身体移動によるものであり、これが有信館剣道の大きな特徴のひとつである。体重がどちらかの足にいつもかかっており、身体移動も足の蹴りではなくて、どちらかの足の踏み込みによる重心移動を行う。片足加重の不安定な状態が威力のある打突にもつながっているといえる。足の筋力を活用した蹴りによる移動ではないのでシニアにとっても有効な足さばきになると思う。

(2)有信館剣道の社会性

民間の剣道場ということもあり、自主的な「やる論理」で修行が展開されていた。やら

されるといったものではなく、スポーツクラブ的な存在であり、生涯スポーツのルーツも見られる。殺傷術から武道への切り替えを全面に出して、打突部位以外を打突した場合は相手に謝するなどの思いやりも醸成して、それらが技法の向上にもつながるとする。稽古は厳しいながらも楽しいものと主張する。さらには、そうした身心技法を通じて、術を向上させていく過程で、人間としての判断力、想像力、洞察力なども自然と養われて、本質的なことに対する理解力も素養として身に付けていった。中倉清の師である中山博道の言説には戦前の軍国主義、他民族差別の風潮が強いなかでも生命の大切さと人間としての教養の豊かさを求めるものがあつた。

IV 結論

幕末から興隆してきた竹刀剣道に剣術の実戦的な身心技法を取り入れ、武術の楽しさ、奥行きを竹刀剣道に求めたのが有信館剣道といえる。竹刀剣道の規約・ルールの中で実戦的である有信館剣道の身心技法、即ち竹刀と真剣の関係を常に研究し剣道の強弱はスピードではない、奇正変化による業の緩急であるとしその術理を残そうとしたのが中山博道であつた。一方、その弟子、中倉清は、とりわけ戦後復活した竹刀剣道でこうした有信館剣道の身心技法を活かし竹刀剣道の競技性を高めようとした。一方、両者とも心法面では有信館剣道の身心技法を深めていくことで、人間としての様々な諸能力向上に努め、豊かさを求めていったといえる。勝ち負けを意識し過ぎるあまり力とスピードに傾斜し、画一的になっていると評される現代の剣道の見直しの素材として本論が少しでも役立つことを願いたい。

